

令和4年度 第2回ゼロカーボン研究会 議事録

会議名	令和4年度 第2回ゼロカーボン研究会
テーマ	「農業分野における脱炭素化」
開催日時	令和4年7月28日(木) 14:30~16:30
開催場所	岡山市 勤労者福祉センター5階 体育集会室
出席者	自治体：19名（うち7名リモート参加）、 事業者・その他：19名（うち6名リモート参加）、講師3名、事務局9名 計50名
配布資料	・資料1 令和4年度ゼロカーボン研究会の概要と第2回テーマについて ・資料2 岡山でのソーラーシェアリングの展開 ・資料3 水上太陽光発電の最新動向とゼロカーボンへの貢献 ・資料4 農業における地中熱の利活用

1. 令和4年度ゼロカーボン研究会の概要と第2回テーマについて

研究会の概要と第2回のテーマについて事務局より説明。

2. 岡山でのソーラーシェアリングの展開について

ネクストイノベーション株式会社：大塚様（以下、「大塚」と記載）より説明があり、下記のとおり質疑応答を行った。（敬称略）

岡山市（吉田）

収支について説明があったが、設備の維持管理や、災害時のリスクについて聞きたい。

大塚

維持管理はほとんどなく、メインは草刈りとなる。

あとはパネルに問題がないか点検したり、パネルの汚れを取ったり。

リスクについては、保険に加入することができ、地震以外は保証される。

岡山市（吉田）

先ほどの費用の説明に維持管理の費用は含まれていないのか。

大塚

含まれていない。規模や状況によって異なるが、保険は年間約8万円、草刈りは年間約10~20万円かかると把握している。

3. 水上太陽光発電の最新動向とゼロカーボンへの貢献

株式会社シエル・テール・ジャパン：渡辺様（以下「渡辺」と記載）より説明があり、下記のとおり質疑応答を行った。

玉野市（チャットからの質問）

台風災害により、パネルが流出・破損した場合、太陽光パネルの有害物質が流出する可能性があるが、対処法の検討はされているか。

渡辺

台風でパネルが破損した例があるが、アンカーが繋がっており、流れることはなかったため、有害物質の流出も最低限で収まった。設置の際はアンカーを多めに使用し、流出しないようにしている。

弊社では、これまでの台風災害のノウハウを活かし施工方法を改良している。どんな台風がきても壊れないものを作ることを目指している。

津山市（チャットからの質問）

処分をする際は、アンカーを抜く必要があるのか。

渡辺

必要である。

4. 農業における地中熱の利活用

特定非営利活動法人地中熱利用促進協会：赤木様（以下「赤木」と記載）より説明を行った。時間の関係で質疑応答は割愛。

5. 意見交換・質問

津山市（チャットからの質問）

FITは10年もしくは20年で終わると思うが、FIT終了後の展望はどのように考えられているか。農業における自家消費分とはどのくらい電気を使用するのか。

大塚

FIT 終了後の方法は大きく二つ。

販売か自家消費か。農業は基本的に自然の中で行うもので、電気を使う必要はない。使用するとすれば、空調システムに活用できる。

真庭市（チャットからの質問）

先ほどのソーラーシェアリングのお話で、参考資料4にある椎茸のハウスの規模と、原木が何本使用されているか知りたい。

大塚

農地一反に対し、50%の遮光率で、しいたけ原木は約4000本を入れている。

岡山市（鷺尾）

3名それぞれに質問したい。

これから岡山地域で普及していくポテンシャルはあると思うが、普及に向けた課題や障害となっているものは何か。

大塚

まずは、理解していただくことが課題と考える。対象は行政、地主さん、金融機関などすべて。

また、ソーラーシェアリングに関して、太陽光は経済産業省、農業は農林水産省なので省庁が分かれることで一本化されない、判断が一定でないところがあり、普及を難しくしている。

渡辺

水上太陽光に関しては、岡山県は非常に理解していただいている地域である。

大きな案件となると、その分関係者が増えるので、その分多くの方に理解していただく必要がある。

赤木

地中熱に関しては、大きく2つの課題がある。

1つ目は、イニシャルコストが高いこと。2つ目は、認知度が低いこと。

イニシャルコストについて、スイスでは25年でイニシャルコストが50%まで下がった例がある。これから日本でも地中熱が普及していけばスイスのようにコストダウンが図れる可能性は十分にある。

地中熱は、イニシャルコストは高いが、寿命は長い。パイプも地中にあるので劣化が少なく、

50年ほどは使える。公共の建物などに採用してもらえれば長く使用でき、長く使用した分投資回収も十分にできる。しかし、実際長い目で見て設備を導入してもらえない状況。20年で見るとコストの面から見ても難しい。

もう1つの認知度については、新居建築にあたり再エネを検討する際に、地中熱が選択肢に挙がるのがほとんどないほど認知度が低い状況。

以上